

# 文字摺通信

第 111 号  
2026年 5月 1日  
発行:文字摺歴史文化社

## 金谷川浅川の斎藤さん宅で “庚申講”の話を聞いてきました。

3月13日(金)福島市金谷川浅川の斎藤さん宅を渡部一磨さんと訪ねてきました。斎藤さん宅は本宮市ふれあい美術館にお勤めの斎藤由美子さん宅で、以前に斎藤さん宅で庚申講を行っており、庚申講で使う道具もあると聞いておじゃましたものです。当日は由美子さんのご両親、斎藤公(ただし)さん、善(よし)さんご夫妻(お二人とも昭和12年生れの88歳)にお話を聞きました。

斎藤さん宅は、松川町浅川の小字が「館」で、小高い丘陵上に2間×1間の稻荷社があったのですが、3.11震災で倒壊したそうです。その他、嘉永4年(1851)の庚申碑や二十六夜碑、山神碑などが残っていました。この館跡の下に斎藤家と本家が並んであり、公さんは分家して9代目だそうです。

斎藤家では、古峯講や雷神講、熊野講、伊勢講などいろいろな講に入っていて、当番にあたりとお膳の支度などの準備が大変だったそうです。講によって、講によって講中のエリアが異なり、加入している家数も異なっていたといいます。

庚申講は隣の本家と行っていたそうです。明和9年(安永元年1772)の銘のある杵が残っていました。講の日は、参加する家々を廻ったり、当番の家の玄関で待っていたり、講中の家からこの杵擦り切れの米を受け取り、それでご飯を炊いたそうです。

右の図は軸装された庚申絵で、最上段に「日」「月」。その下、中央に、一面六臂の「青面金剛」が立ち、二童子が両側に侍ります。青面金剛は

